

ある小さな灯り。機窓からぼんやりとながめている時間。現代の旅愁である。

何もかも見えない闇と何もかも見える光の狭間の僕ら
喜多宣夫

哲学的なむつかしい主題を抱きこんだ今月の何首かに注目した。この世に生まれる以前と生まれてからではなさそう。生きていくということは、すべてが見える過去とすべてが見えない未来の狭間ということなのか。今いる場所から一步踏み出したらどうなるのか。そこもまた、闇と光の狭間なのだろう。

試されているのだろうかころと団栗三個転がって来る
田中和美

道を歩いている場面を想像していいのだろう。歩いている足下になぜか三箇所がつてきたドングリ。三箇所も拾うか、無視するか、一個だけ拾うか。そんな一瞬の心の動きに取材した気合い。

マッコリは白く濁ってうつつすらと私の顔も濁って写る
桜 望子

今月の一連はすべて酒にかかわる歌。この歌のマッコリは韓国・朝鮮の酒。にごり酒である。「濁つて」を二回つかって、朝鮮料理店にいる「今」の自分をクローズアップしている。

宮崎ゆ来て七年目 木犀の初花銀の薩摩の時間
生野由美子

宮崎には宮崎の時間が流れていたように、鹿児島には

鹿児島島の時間が流れている。ギンモクセイの初花を見てそのことに思いたった、というのだろう。下句、「……銀の薩摩の時間」は肯定的な感じなので、薩摩の生活に充実している意を読みとってよさそう。

雨脚の強くしあれば窓のうへに太くなりゆく根を張るごとく
梅原ひろみ

すぐ前の歌に「車窓」とあり、その窓はたぶん電車か列車の窓らしいから、この歌の窓もそう理解しておきたい。第三句以下、窓ガラスを流れおちる雨滴の動きをていねいに描写している。描写のおもしろさを前面に出した意図を読み取っておきたい。

冷房無き息子の部屋より越して来し息子の匂いの掛け布団畳む
堤 幸子

特別に暑かった今年の夏の思い出。やつと男っぽい匂いがしはじめたまだごく若い、というよりまだ小さな息子さんらしい。布団を畳まないで学校に行ってしまったのだろう。朝の母親の時間が読める一首。

むらきもの心やどりしなきがらを焼くと思へば涙と
まらず
野見山鈴子

まだ四十八歳の息子さんに先立たれた悲しみをうたった今月の八首、深く心にしみた。「むらきもの」という枕詞が本来の漢字「群胆の」を思い起こさせて、悲しい。一連中に「学友と同期入社の人と働き盛り棺運ばる」とあって、働き盛りに他界されたショックの大きさが読みとれる。